

# 神の言語存在論的証明

## 第1回 神の存在証明の新しい道—言語からのアプローチ

神の存在を証明しようとする試みは、古代から現代に至るまで、哲学者や神学者によって続けられてきました。

存在論的証明、宇宙論的証明、目的論的証明といった古典的な論法は広く知られています。

しかし、ここではあまり注目されてこなかった新しい角度——人間の言語能力に焦点を当ててみたいと思います。

人間はなぜ言葉をおせるのか？ その根源を探っていくと、自然科学や進化論だけでは説明のつかない領域に行き着きます。そして、その先に神の存在を示唆する論理が現れてくるのです。

### 1. 言語習得における「臨界期」

発達心理学や言語学の研究によると、人間が言語を習得する過程には「臨界期 (critical period)」と呼ばれる時期があり、幼少期に他者の言葉を聞き、模倣し、対話することで、初めて文法的な言語を身につけることができます。

逆に、この時期に言語環境から切り離された場合、のちに社会復帰しても完全に言語を獲得することはできません。

言語環境から隔離された子どもの事例の中で、もっとも詳しく記録されているのが「ジーニー」と呼ばれたアメリカの女性 (1970年発見) のケースです。幼少期に極度の虐待と孤立の中で育った彼女は、発見後に集中的な言語訓練を受けましたが、文法的な文章を産出する能力は最終的に回復しませんでした。このケースは、臨界期を過ぎると言語の完全な習得が著しく困難になることを、実証的に示しています。

つまり、人間の言語は、孤立した個体から自然に生まれるのではなく、必ず「他者からの言葉の伝達」があって初めて成立するのです。

### 2. アダムとエバは誰から言葉を学んだのか

この原則を人類始祖に適用すると、重大な問いが浮かび上がります。アダムとエバは誰から言葉を学んだのでしょうか？

もし彼らが最初の人間で、親もいなかったとすれば、言語を教え導く人間的存

在は存在しません。

進化論的に「音声の偶発的な模倣が言語に発展した」と説明する試みもありますが、文法を持つ複雑な言語が偶然に成立し、さらにそれを臨界期の中で伝承してきたという説明には無理があります。

人類が最初から会話する存在であったことは、人間以外の存在から言語が与えられたことを示していると考えられます。その存在こそ、神や天使などの霊的な存在であると解釈できるのです。

### 3. 聖書に描かれる「最初の言葉」

聖書はこの点を裏づけるように、人間の始まりから神との会話があったことを記録しています。

#### 創世記 2 章 16～17 節

主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。

⇒アダムは最初から神の言葉を聞き、その意味を理解できる存在として造られていた。

#### 創世記 2 章 19～20 節

そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。

⇒アダムは動物に名前をつけている。言語能力が前提とされている。

#### 創世記 3 章 9～10 節

主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。彼は答えた、「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」。

⇒アダムが罪を犯した後もなお、神との会話が成立している。

#### ヨハネによる福音書 1 章 1～4 節

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言に命があった。

⇒人間の言語の根源が神にあることを示している。

これらの聖句は、人間の言葉が「神の言葉」に根ざしていることを示しています。

#### 4. チンパンジーとの比較から見た人間の特異性

霊長類の研究では、チンパンジーやボノボが簡単な記号を理解したり、手話がある程度習得することが知られています。

しかし、それは断片的な記号操作であり、文法を伴う複雑な言語体系を自ら創造することはできません。

人間は他の動物と異なり、生まれながらに言語の基盤を持っており、それを他者から受け継ぐことによって豊かなコミュニケーションを営みます。

この「他者依存性」と「文法的言語の存在」こそが、人間の特異性を際立たせています。

#### 5. 「言語存在論的証明」の論理

以上を踏まえて、新しい神の存在証明の形を「言語存在論的証明」と呼ぶことができるでしょう。論理は以下のように整理されます。

言語は他者から受け継がれなければ習得できない。

↓

人類の最初の間が言語を持っていたなら、彼らは言葉を与えた「最初の他者」を必要とする。

↓

その存在は人間以外のものであり、神または霊的存在に他ならない。

↓

よって、人間の言語の存在そのものが神の存在を証明している。

この論理は、神が「ロゴス（言）」で人間に語りかけたという聖書の内容と一致します。

#### 6. まとめ—言葉は神のかたち

従来の神の存在証明が「宇宙の起源」「秩序」「目的」を根拠とするのに対

し、ここで提案した証明は、「人間の言語」という日常的かつ普遍的な営みに立脚しています。

人間が言葉を話し、互いに理解し合えるという事実。それは偶然の進化の産物というよりも、神が人間にご自身の言葉を吹き込まれたことの痕跡と考える方が自然です。

言葉は単なる道具ではなく、神のかたちの一部であり、神と人間を結ぶ架け橋です。

私たちが会話できるということ自体が、すでに神の存在を証ししている——この視点から、人間の言語を見直すとき、神の実在性が新たな角度から鮮明に浮かび上がってきます。

## 第2回 「言語存在論的証明」に対する批判と応答①

### 1. 自然進化による説明が可能ではないか

【批判】

進化論や言語学の立場からは、言語は神や霊的存在を想定しなくても説明できるとされます。チョムスキーの生成文法理論は、言語能力を人間の脳の生得的構造とみなし、外部から与えられる必要はないと主張しています。

【応答】

確かに言語能力に生得的な基盤があることは多くの研究が示しています。しかし、重要なのは「基盤」だけでは人間は言語を使えないという点です。基盤があっても、幼少期に他者からの言葉を受け取らなければ、言語は開花しません。

進化論では脳に備わっている能力として人間の言語力を説明しますが、「最初の人間が誰から言葉を聞いたのか」という問いには答えられません。この隙間にこそ、神や霊的存在の役割を考える余地が残されています。

### 2. アダムとエバは神話的存在にすぎないのではないか

【批判】

アダムとエバは歴史的存在ではなく、神話的物語に過ぎないとする見解があります。そうだとすれば、「彼らが神から言語を授かった」という議論も、神話の物語を前提としたものにすぎず、証明としては成立しないのではないかという批判が考えられます。

【応答】

アダムとエバを歴史的実在とみるか象徴的存在とみるかは解釈の問題ですが、重要なのは「人間が最初から言語を持っていた」という普遍的メッセージです。聖書の物語はその事実を神学的に表現しています。仮にアダムとエバを象徴と解釈したとしても、「言語の起源には人間を超えた源泉がある」という核心は揺らぎません。

### 3. 個人の臨界期を人類全体に適用するのは飛躍ではないか

【批判】

臨界期の理論は個人発達の観察に基づいており、それを人類全体の起源にそのまま当てはめるのは飛躍ではないかという批判が考えられます。初期の人類は集団的に音声模倣を繰り返し、やがて簡単な言語を自発的に生み出した可能性もあるとの主張も可能でしょう。

【応答】

この批判は一定の妥当性を持っています。しかし、「集団的に自発的な言語を生み出す」という仮説にも問題があります。

どんなに模倣が行われても、それが文法的秩序を持つ体系に進化するには、最初に「意味ある言葉のモデル」が必要です。個人レベルでの臨界期の実実は、人類全体においても「言葉は他者から伝えられるもの」という普遍的法則を反映していると考えられます。

### 4. 未解明な領域を「神」で埋めているだけではないか

【批判】

「言語の起源が説明できないから神を想定する」というのは、科学の隙間を神で埋める「隙間の神（God of the gaps）」論法にすぎないのではないかと。

【応答】

確かに「説明できないから神」と言うだけなら安易です。しかし、ここでの議論は単なる「隙間埋め」ではありません。言語は「関係性」と「他者からの伝達」を必須とするものであり、この構造そのものが「最初の他者」の存在を必然的に要請します。つまり、言語の本質から論理的に導かれる帰結であって、単なる無知の隙間に神を置いているわけではありません。

さらに言えば、「言語の起源」は科学が将来解明できる可能性がある問題というよりも、構造的に科学的解明の外側にある問いです。科学的説明とは、すでに存在する法則や物質のパターンを記述するものです。しかし「最初の人間が誰から言葉を受け取ったか」という問いは、その「最初」以前の状態を問うものであり、物質的・時間的連続性の内部で答えることができません。この問いが「神の隙間」ではなく「神の論理的必然性」を示すゆえんです。

## 5. 言語と宗教を直結させるのは不自然ではないか

### 【批判】

言語は社会や文化の産物であって、必ずしも宗教や神と結びつける必要はなく、人間が言葉を使うのは協力や共同生活のためであり、宗教的解釈は後付けではないかという批判が考えられます。

### 【応答】

確かに言語には社会的機能があります。しかし、社会的機能だけでは説明できない根源的問いが残ります。「なぜ人間だけが文法を持つ複雑な言語を持つのか」「なぜ言語は他者から受け継ぐことを必須とするのか」。この問いに対して、神が「言葉（ロゴス）」を通して人間を造られたという聖書の視点は、一つの合理的な答えを提示しています。社会的説明と宗教的説明は対立するものではなく、むしろ補完関係にあります。

## 第3回 「言語存在論的証明」に対する批判と応答②宇宙人説とその反論

### 1. 「宇宙人」の定義

本記事で扱う「宇宙人」という言葉は、しばしば曖昧に使われますが、まずは定義を明確にしておきましょう。

ここでの「宇宙人」とは、人間と同じように肉体を持つ地球外知的生命体を指します。

つまり、靈的存在や神話的存在ではなく、どこか地球以外の惑星で進化したと仮定される高度文明を持つ生物という意味で用います。

### 2. 宇宙人説の主張

一部の思想や仮説では、人類の起源や文明の発展を説明する際に「宇宙人が関与した」と考えます。とりわけ「人間の言語は神ではなく宇宙人によって与えられた」とする説も存在します。代表的な論点は次の通りです。

言語の複雑さは自然進化だけでは説明困難である。

↓

人類の発達速度は異常に速く、外部からの知的介入があったと考える方が合理的だ。

↓

神や天使といった霊的存在よりも、肉体を持つ宇宙人の方が「現実的な説明」になるのではないか。

一見もっともらしく聞こえるこの説ですが、慎重に検討すると多くの問題点が見えてきます。

### 3. 無限後退の問題

宇宙人が人類に言語を与えたと仮定した場合、その宇宙人は誰から言語を得たのかという問いがすぐに浮かびます。

もし彼らもまた別の宇宙人から言語を与えられたのだとすれば、さらにその起源は？ という無限後退に陥ります。

結局、どこかで「最初に言語を与えた存在」を認めなければなりません。

その存在は宇宙人のような有限の被造物ではなく、言語そのものの根源に位置する超越的存在——聖書が証言する「神」であると考えの方が筋が通ります。

### 4. 言語の霊的・抽象的特性

人間の言語は、単なる情報伝達的手段を超えて、次のような特性を持っています。

抽象的概念を表現できる

倫理や宗教的意味を言葉にできる

未来や過去を語り想像力を共有できる

このような性質は、生存のための道具以上のものです。もし宇宙人が言語を与えたとしても、なぜそれがここまで霊的・抽象的性格を持つのかを説明できません。

むしろ、「言語は神のかたち（ロゴス）として人間に与えられた」という解釈の方が、人間の言語の特性を自然に説明できます。

### 5. 聖書の証言

聖書は、人間の言語が神に由来することを一貫して語っています。

創世記 2 章 16～17 節

主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。

⇒神がアダムに語りかけたこの場面は、人間と言語の出会いが神との対話であった

ことを示す。宇宙人のような物質的存在との交渉ではなく、霊的・人格的存在である神との言語的関係が最初にあった。

### 創世記 2 章 19 節

そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。

⇒アダムが動物に名前をつけるということは、アダムに言語能力が与えられていた証拠です。

### ヨハネ福音書 1 章 1～2 節

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。

⇒「言は神であった」という宣言は、言語の根源が宇宙という物質的秩序の内部にあるのではなく、その外側・上位にある神的次元にあることを示す。宇宙人はこの外側に立つことができない。

聖書の描写は、人類の言葉が宇宙人ではなく神のロゴスに根ざしていることを示しています。

## 6. 神と宇宙人の違い

最後に神と宇宙人の違いを整理しておきましょう。

宇宙人：物理的な宇宙のどこかに存在すると仮定される有限の生命体。進化や物理法則に従う存在。

神：時間と空間を超えた根源的存在。言語や存在の基盤そのもの。

人間の言語の根源を説明するには、有限の宇宙人では不十分です。むしろ、言語の根源を担えるのは「超越的で永遠の存在 = 神」しかありません。

## 7. 結論

「宇宙人が人類に言語を与えた」という説は、一見魅力的に聞こえますが、以下の弱点を抱えています。

無限後退の問題を解決できない。

言語の霊的・抽象的特性を説明できない。

聖書の証言と矛盾する。

科学的な証拠に乏しい。

なお、「科学的証拠に乏しい」という批判は神学的議論にそのまま返ってくる可能性があります。この証明の目的は科学的証明ではなく、論理的蓋然性の提示です。科学が観察と再現を基本とするのに対し、存在の起源をめぐる問いは哲学・神学の領域に属します。「言語存在論的証明」は、科学的証明ではなく、「神が存在するとすれば言語の謎が最も合理的に説明される」という推論的論証（アブダクション）です。

したがって、人類の言語を説明する上で、宇宙人説よりも「神が人間に言葉を与えた」という聖書的理解の方が、論理的にも神学的にもはるかに堅固です。

言語は単なる進化の副産物ではなく、神のかたち（ロゴス）として人間に与えられた賜物です。

## 第4回 「言語存在論的証明」と哲学・言語学の接点

人間の言語能力を出発点とする「言語存在論的証明」は、神の存在を考える新しいアプローチです。

この視点をさらに深めるには、哲学史や言語学の巨匠たちの議論と照らし合わせてみるのが有効です。

ここでは、アウグスティヌス、ウィトゲンシュタイン、チョムスキーの三者に焦点を当て、彼らの思想と「言語存在論的証明」の関係を整理してみます。

### 1. アウグスティヌス—言葉の神的起源

アウグスティヌス（354-430）は『告白』の中で、幼児がどのように言語を学ぶのかについて、自らの経験をもとに考察しています。

彼は、赤子が泣き声や身振りで欲求を表し、やがて母や養育者の言葉を聞いて理解し、模倣することで言語を獲得する、と記しました。

ここで示されているのは、言語が必ず「他者から受け継がれる」ものであるという洞察です。

人間は孤立した存在ではなく、言葉を媒介にして共同体に迎え入れられる存在である、と彼は見抜いていました。

さらにアウグスティヌスは、言語の根源を「神の言」に結びつけました。

創世記の2章16～17節で、神はアダムに直接語りかけ、「取って食べてはならない」という戒めのみ言を与えました。

人間の最初の言葉の経験が神との対話であったことを示すこの聖句は、まさに

アウグスティヌスの神学的直観と一致します。

彼にとって言語は、単なる道具ではなく、神からの賜物であり、人間が神に似せて造られたことの証なのです。

興味深いことに、ウィトゲンシュタインは『哲学探究』の冒頭でこのアウグスティヌスの言語習得記述を引用し、批判的検討の出発点としています。ウィトゲンシュタインはアウグスティヌスの記述が「言語の本質を指差しによる名称付与として理解しすぎている」と見ましたが、両者が共通して「言語は他者との関係から生まれる」という洞察を持っていたことは変わりません。対立の中に共鳴がある——このことは「言語の共同性」がいかに根本的な問題であるかを示しています。

## 2. ウィトゲンシュタイン—言語ゲームと共同性

20世紀の哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、言語と人間の世界理解の関係を徹底的に探究しました。

『論理哲学論考』では、「言語の限界が世界の限界である」と述べ、人間の思考や認識が言語に規定されていることを明らかにしました。

さらに『哲学探究』では、「私的言語は不可能である」と断言します。つまり、言語は必ず他者と共有されるものであり、孤立した個人の中で完結することはできないと述べ、「言葉は最初から対話的である」という事実を強調しました。

この視点は、「最初的人类は誰から言葉を学んだのか」という問いと深く関わります。

もし言語が本質的に共同的な営みであるならば、最初的人类が言語を持ち得たこと自体が、すでに「彼らと対話する他者の存在」を要請します。

その「最初の他者」が神である、という「言語存在論的証明」の論理を、ウィトゲンシュタインの言語論は間接的に支えているのです。

## 3. チョムスキー—普遍文法と進化論の問題点

現代言語学の巨匠ノーム・チョムスキーは、人間の言語習得を説明するために「生成文法」理論を打ち立てました。

彼によれば、人間の脳にはあらかじめ「普遍文法」と呼ばれる構造が埋め込まれており、子どもは限られた言語入力からでも母語を習得できるというのです。

この理論は「言語能力は生得的（うまれつき）である」ことを強調しています。しかし同時に、ここに進化論的説明の難しさが浮き彫りになります。

チョムスキー自身も、言語能力の起源について、ある突然変異的な出来事によ

って脳に言語機能が一挙に現れたという可能性を示唆したことがあります。

ところが、進化論の一般的な理解では、複雑な能力は徐々に蓄積していくはずで、文法を伴う言語のような高度な機能が突然現れることは、ダーウィンの漸進主義では説明困難です。

実際、進化生物学者や認知科学者の間でも、「言語の進化はダーウィン理論の中で最も説明の難しい問題」とされています。

人類以外の霊長類は、音声や記号をある程度扱えるにもかかわらず、文法的言語を創造できないからです。

この「進化論のギャップ」をどう理解するか。自然主義者は「まだ研究が足りない」と考えますが、「言語存在論的証明」の立場からすれば、それはむしろ「神が人間に特別に与えた能力」であると解釈するのが合理的です。

言語が人間にのみ突然出現した事実は、自然進化を超えた次元を想定させるのです。

#### 4. 三者を貫く共通の線

アウグスティヌスは、言語が神からの賜物であることを直観しました。

ウィトゲンシュタインは、言語が共同性を本質とし、孤立した個体には成立しないことを論理的に示しました。

チョムスキーは、言語能力が生得的であり、自然進化の説明を超える「突然の出現」であることを明らかにしました。

この三者の議論を通じて浮かび上がるのは、人間の言語の根源には人間を超えた源泉があるということです。

それは偶然の進化ではなく、聖書が証言する「神の言（ロゴス）」から理解するのが自然だと言えるでしょう。

#### 5. 結論

言語は、人間を人間たらしめる根本的能力です。それは生物学的進化の単なる副産物ではなく、哲学・神学・言語学の三方向から見ても、人間が神のかたちにかたどられて造られたことの証と考えることができます。

アウグスティヌス、ウィトゲンシュタイン、チョムスキー。時代も背景も異なる三人の人物が、それぞれの方法で「言語の背後にある何か」を指し示しています。

その「何か」を神と呼ぶとき、言語そのものが神の存在を証しているのだと言えるでしょう。

## 第5回 ヨハネ福音書のロゴス概念と現代言語哲学—神の言と人間の言語の接点

### 1. ロゴスとは

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。」（ヨハネ福音書 1 章 1～2 節）

ヨハネによる福音書の冒頭は、聖書の中でも最も力強い言葉の一つです。

ここで用いられている「言（ことば：ロゴス）」は単なる「言葉」を意味するだけでなく、ギリシャ哲学とユダヤ思想を背景に持つ深遠な概念です。

ストア哲学では宇宙を貫く理法、ユダヤ思想では神の知恵や創造の原理として理解されてきました。

ヨハネはこのロゴスを「神そのもの」とであると宣言し、さらに「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」（ヨハネ福音書 1 章 14 節）と記しています。

つまり、神の言葉は単なる象徴や記号ではなく、存在そのものとして現れ、人類の歴史に具体的に臨んだというのです。

このような言（ロゴス）に対する理解は、現代言語哲学の議論と重ね合わせることで、新たな光を放ちます。

### 2. ウィトゲンシュタイン—言語の共同性

20 世紀最大の哲学者の一人、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、言語が人間の世界理解を決定づけると考えました。

『論理哲学論考』では「言語の限界が世界の限界である」と述べ、人間の認識は言語の枠組みを超えることができないと主張します。

さらに『哲学探究』では「私的言語は不可能」とであると論じました。言葉は必ず共同体の中で意味を持ち、他者との関わりにおいて初めて成立するのです。

これはヨハネの「言は神と共にあった」という表現と一致します。

言葉は孤立して存在するのではなく、必ず「共にある」もの。人間の言語の本質が共同性にあるとすれば、その起源においてもまた「人間を超える他者」、すなわち神との対話が前提とされていると解釈できます。

### 3. ハイデガー—言語は存在の家

マルティン・ハイデガーは、「言語は存在の家である」と述べました。人間は言語を通して存在を理解し、世界を構築します。言語なしには、人間は世界を意味あるものとして経験することができません。

この視点から見ると、ヨハネが語る「言は神であった」という宣言は、言葉と存在を切り離さない理解とつながります。

言葉が存在の家であるならば、その根源にあるロゴスは、存在そのものの基盤である神と同一である、というヨハネの主張は哲学的にも意味を持つのです。

ハイデガーの言語論は、ロゴスを存在の根源として理解するための哲学的補助線となります。

なお、ハイデガーは晩年に「神の不在の時代」における「聖なるもの」への問いを深め、言語こそがその「聖なるもの」の到来を可能にする場であると考えました。「詩人は語ることによって神を呼び寄せる」という彼の言葉は、言語が神的次元への通路であるというヨハネのロゴス理解と、意外なほど近い場所に立っています。

#### 4. チョムスキー—普遍文法と進化論の課題

現代言語学の巨匠ノーム・チョムスキーは、人間の言語習得を説明するために「普遍文法 (Universal Grammar)」を提唱しました。

すべての人間の脳には、言語獲得のための構造が生まれつき備わっており、それゆえ子どもは、限られた入力からでも母語を容易に習得できるというのです。

この理論は「言語は人間に固有の生得的能力である」ことを示しています。しかし同時に進化論的な説明に大きな課題を突きつけました。

チョムスキー自身、言語能力はある時点で突然出現した可能性を示唆しています。ダーウィンのような漸進的進化では、文法を伴う高度な言語が、なぜ人間においてのみ現れたのかを説明することは困難です。

実際、霊長類研究では、チンパンジーやボノボが記号や手話を使うことはあっても、文法的体系を自ら創造することはできません。

この「飛躍」は自然主義的進化では説明しにくく、むしろ「人間に特別に与えられた能力」として理解する方が合理的とも言えます。

ここに、ヨハネのロゴス概念との接点があります。神が「言」を通して人間を創造したという聖書の証言と、言語が人間固有の能力であるという現代言語学の発見は、異なる学問領域から同じ真理を指し示しているのかもしれない。

#### 5. ロゴスと現代言語哲学の交差点

こうして見てきたように、ヨハネのロゴス概念と現代言語哲学には多くの共通

点があります。

言は神と共にあった（共同性）→ ウィトゲンシュタインの「私的言語不可能論」

言は神であった（存在そのもの）→ ハイデガーの「言語は存在の家」

言は肉となった（具体化・特異性）→ チョムスキーの普遍文法。言語能力が人間という具体的な存在に刻まれ、他の生物にはない固有の能力として体現された事実と対応する。

これらの接点を通じて、言語は単なる記号体系ではなく、存在と真理に関わる根源的な現象であることが浮かび上がります。

## 6. 結論—言葉は神のかたち

ヨハネ福音書は、言葉そのものを神の現れとして理解する道を開きました。そして、現代言語哲学や言語学は、言葉が人間の存在を規定するものであることを明らかにしました。

両者を架橋する視点から見れば、言語は偶然の産物ではなく、神のかたちとして人間に与えられた能力だと理解できます。

人間が言葉を用いて互いに理解し合い、世界を意味づけること自体が、神の実在性を証しているのです。